

五雲会

平成三十年六月十六日(土) 正午始

演目の解説

養 ツレ木谷 哲也
シテ辰巳 和磨

老

ワキ梅村 昌功
間野村万之丞

大鼓 大倉栄太郎
小鼓 船戸 昭弘

太鼓 澤田 晃良
笛 藤田 貴寛

後見 宝生 和英
和久莊 太郎

地謡 川井 賢郎
金瀬 隆士
内藤 飛能

山内 満次郎
辰巳 崇生
高橋 憲正

佐渡 狐

河野 佑紀

能村 晶人
野村 万歳

〜休憩十五分〜

八 ツレ金森 良充
シテ佐野 弘宜

島

ワキ 則久 英志
間上杉 啓太

大鼓 亀井 洋佑
小鼓 飯富 孔明

笛 成田 寛人

後見 佐野 由於
小林 晋也

地謡 朝倉 大輔
田崎 淳司
當山 玄宜

渡邊 茂資
金井 雄二
金森 秀祥

〜休憩十五分〜

杜 シテ野月 聡

若

ワキ 大日方 寛

大鼓 高野 彰
小鼓 坂田 正博

太鼓 大川 典良
笛 栗林 祐輔

後見 中村 孝太郎
大友 順
藤井 秋雅

地謡 上野 能寛
今井 基
金野 泰大

澤田 宏司
小倉 健太郎
小倉 伸二

終演予定 午後五時十五分頃

能「養老」(よろろう)

美濃の国に薬の水が出たというのを聞き、帝は調べて来るよう臣下に命じます。臣下は老人と水桶を持った若い男に出会い、謂れを聞くと、何気なく飲んだ滝の水が爽やかだったので、家まで運んで親に飲ませたところ、とても元氣になったことから、老いを養う滝という名になったことを聞きます。親子は薬の水の出どころを教え、尚も古今のめでたい水の謂れを語り、臣下の前から去って行くと、妙な音楽が聞こえて山神が現れ、爽やかな舞を舞います。

狂言「佐渡狐」(さどぎつね)

佐渡の国の百姓と越後の国の百姓が、領主に年貢を納めに行く途中で道連れになり、佐渡に狐がいるかないかの論争になります。二人はそれぞれの一(ひと)腰(こし)一(ひと)刀(やいば)を賭け、役人の奏者に判定を頼むことにします。先に年貢を納めに入った佐渡の百姓は、実は狐を見たことがなかったため、奏者に賄賂を渡しその形や色を教える前に出ると...

能「八島」(やしま)

旅の僧が、八島の浦で老若二人の漁師に出会います。僧が一夜の宿を乞うと、初めは断られてしまいますが、老人は僧が都の人と聞いて、泊めることにします。暫し都を懐かしんでいた老人に、僧が古の源平合戦の有様を尋ねると、老人は源義経の戦の様子、景清と三保谷四郎の鏝引きのことを詳しく語ります。あまりに詳しいその語りに不審を抱く僧に老人は義経と灰めかして消えてしまいます。その夜、僧の夢の中に義経は在りし日の姿で現れ、流した弓を取り返したと、また修羅道の苦しみを再現します。修羅能の大作。

能「杜若」(かきつばた)

今を盛りと咲き誇る杜若。三河の国八橋を訪れた僧は、一人の女に呼び止められます。女は業平が東下りの途中で、この八橋で詠んだ杜若の歌の話をし、自宅へ僧を招きます。その夜、女は昔、業平が宮中での豊明節会で身に着けた高子の後の美しい衣と、冠を身に付けて現れます。不思議に思う僧に、女は我こそは杜若の精であると明かし、業平の東下りの様子を舞って見せ、草木国土悉皆成仏の喜びを僧に告げると、夜の白むと共に消え失せます。

次回予告

平成三十年七月十四日(土) 正午始

鶺鴒	半	経	
飼	薮	政	
大友	藪	金森	
順	克徳	隆晋	



◎入場料 一般 / 5,000円
学生 / 2,500円

◎会場 宝生能楽堂

J R水道橋駅東口 徒歩3分
都営地下鉄三田線 水道橋駅 A1出口 徒歩1分

☎113-0033

東京都文京区本郷1-5-9